

微熱の中にて

あの時に比べれば
街はどこかよそよそしい騒音に満ち
僕の耳は何ひとつ捉えることはない

あの時に比べれば
人々は何か借物の笑い声に満ち
僕の眼はひとつの視線とも出会わない

時代の空気というものはやはりあるものだ
そして封じ込めることは
やはりできないものだ

差しのべた手
差しのべられた手
そしてほどかれた手と手さえ消し去られ

精神は単なる芸術となり
生活はただの波動となり
喜びは単なる笑いとなり

愚劣なものは相も変わらず
愛するものは変わり果て
平凡を愛することにももう飽きた

無意味な^{よわい} 齢を重ねるということは
もしかしたらこうしたものかもしれない
「過ぎし日」などと呟きはじめた時が
それがもう既に行き止まりなのだから

(1989.11.19)